



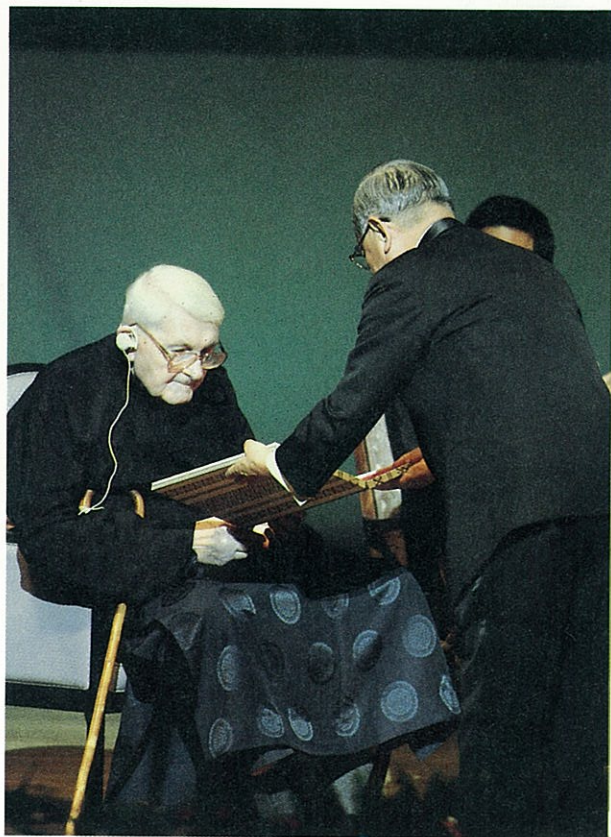
THE FUKUOKA
ASIAN CULTURAL PRIZES

1990
第1回福岡アジア文化賞
創設特別賞

THE FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES 1990
SPECIAL COMMEMORATIVE PRIZES



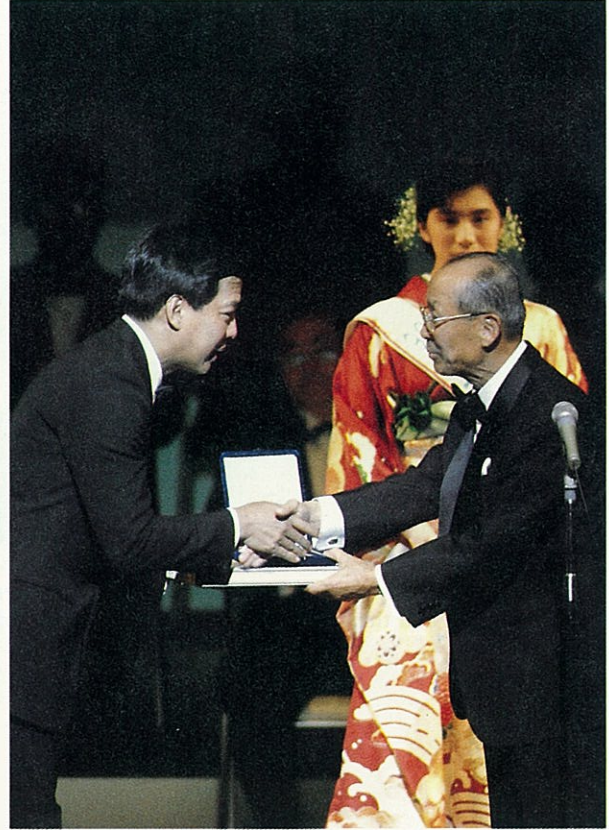
▲福岡アジア文化賞創設特別授賞式
The whole view of the award-giving ceremony stage



▲桑原市長よりジョゼフ・ニーダム氏にメダル、賞状の贈呈
Dr. Joseph Needham given a Medal and a Diploma
of Honor by Mayor Kuwahara



▲贈賞後、握手をかわす李小棠氏と桑原市長
Mr. Li Xiao-Tang shaking hands with Mayor Kuwahara after the award-giving



▲川合理事長より、代理出席のピラボン・カセムシー閣下にメダル、賞状の贈呈
His Excellency Birabhongse Kasemsri, as a substitute, given a Medal and a Diploma of Honor by Director General Kawai



▲黒澤明氏への賞状を読みあげる桑原市長 左は代理出席の黒澤久雄氏
Mayor Kuwahara reading off Diploma of Honor to Mr. Akira Kurosawa
Mr. Hisao Kurosawa as his substitute (left)



▲贈賞後、握手をかわす矢野暢氏と川合理事長
Dr. Toru Yano shaking hands with Director General Kawai after the award-giving



▲授賞式のフィナーレ。花束を贈った子供たち、各国大使御夫妻もステージにあがり、受賞者を讃えました。
The finale of the award-giving ceremony. The children presenting bouquets to the awardees. All the Asian ambassadors and their wives celebrating the prize winners on the stage.



▲晩餐会であいさつをする桑原市長
Mayor Kuwahara making an address at the dinner party



▲ホテル日航福岡での晩餐会
The dinner party at the Hotel Nikko in Fukuoka



▲「筑紫楽所」による雅楽の演奏
The performance of Japanese court music by Chikushi-gakuso



ル堂 創設特別堂

▲講演するジョゼフ・ニーダム氏
Dr. Joseph Needham lecturing at the Commemorative Lectures



▲講演する矢野暢氏
Dr. Toru Yano lecturing at the Commemorative Lectures



第1回 福岡アジア文化賞 創設特別
THE FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES 19
▲巴金氏のメッセージを伝える李小棠氏
Mr. Li Xiao-Tang conveying Mr. Ba Jin's message.



▲あいさつをする黒澤久雄氏
Mr. Hisao Kurosawa addressing for his father,
Mr. Akira Kurosawa



▲記念講演会々場
A view of the Commemorative Lectures room

受賞者
RECIPIENT

巴 金 (中国)
BA Jin (China)

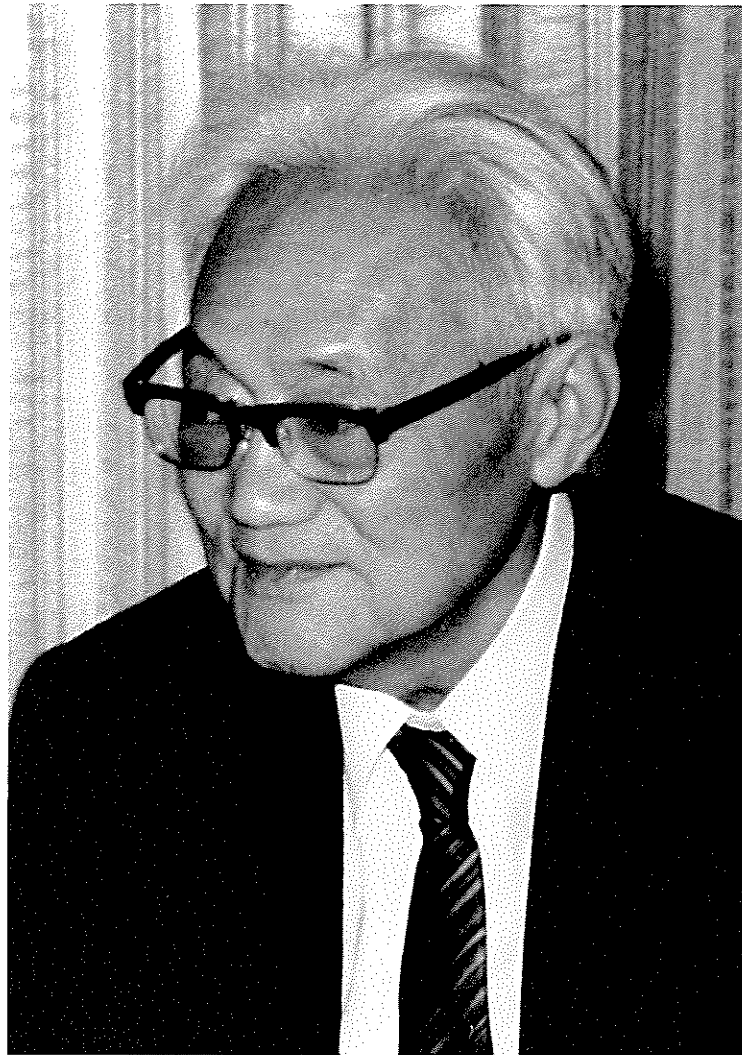
黒澤 明 (日本)
Akira KUROSAWA (Japan)

ジョゼフ ニーダム (英国)
Joseph NEEDHAM (U.K.)

ククリット プラモート (タイ)
Kukrit PRAMOJ (Thailand)

矢野 暢 (日本)
Toru YANO (Japan)

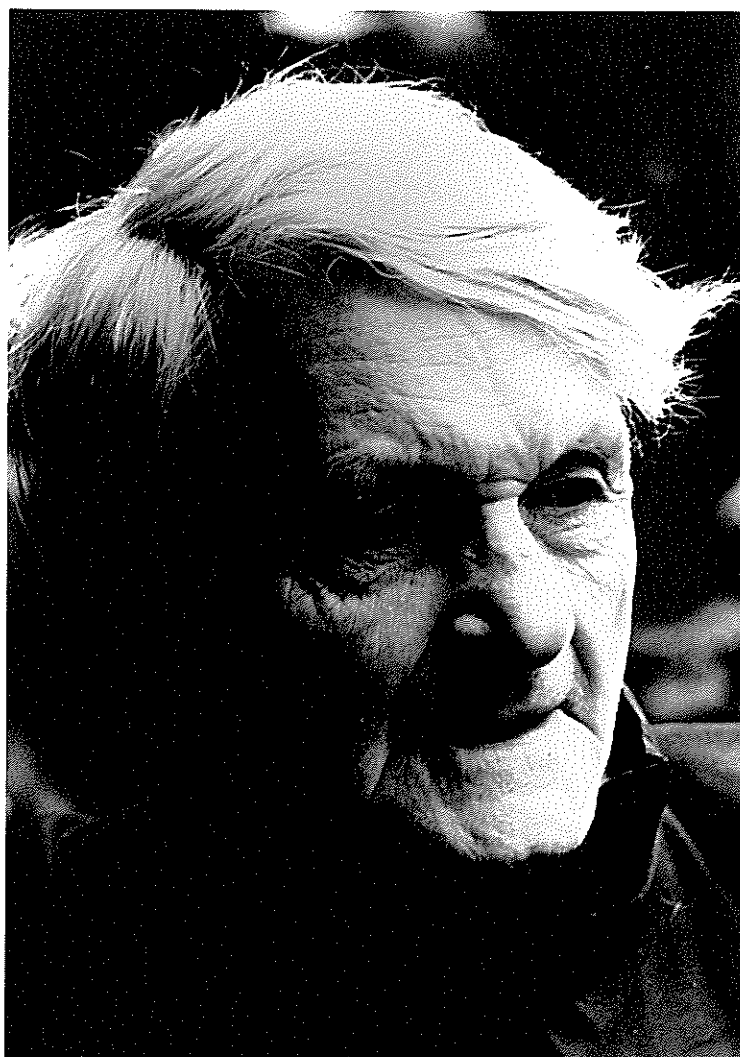
(順番はアルファベット順)
(alphabetical order by surname)



巴 金
BA Jin



黒澤 明
Akira KUROSAWA



ジョゼフ ニーダム
Joseph NEEDHAM



ククリット プラモート
Kukrit PRAMOJ



矢野 暢
Toru YANO

贈賞理由

巴 金

現代中国最高の作家。代表作『家』、『寒い夜』等は、深い人類愛や人道主義に基づいており、国際的にも評価が高い。一貫して中国の近代化を主張、文革復帰後、社会批判と同時に誠実な自己批判を展開。文学活動を通して社会に大きな影響を与えた。

黒澤 明

『羅生門』による第12回ベネチア国際映画祭グランプリの受賞は、日本映画の存在を世界中に知らしめるきっかけとなる。世界の先鋭映画人から偉大な師と仰がれ、その影響力は、今や絶大なものがある。映像により日本文化を海外に伝えた業績は大きい。

ジョゼフ ニーダム

中国科学史の世界的権威。ライフ・ワークであるその著『中国の科学と文明』は、戦後最大の知的業績であり、中国文明のみならず、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。ユネスコ創設にも貢献。20世紀の巨人と評されている。

ククリット プラモート

作家、ジャーナリスト、評論家、政治家、実業家等々と幅広い活躍をしている現代タイの最高の知識人。『王朝四代記』、『多くの生涯』、『赤い竹』はタイ文学の傑作。特に『赤い竹』は、西欧十数ヶ国で翻訳され同氏を世界に知らしめた作品である。

矢野 暢

東南アジア地域研究の分野で新しい手法を開拓し、画期的な成果をあげる。日本の社会科学世界の中心的存在。世界的規模での人脈を活かし、各種の国際会議、シンポジウムを企画運営し、世界の学術文化交流に多大な貢献をなしている。

プロフィール



氏名 巴金
(BA Jin)
本名 李 堯棠 (Li Yaotang)
生年月日 1904年11月25日生
国籍 中国

巴金氏は、1904年、四川省成都の大地主の家に生まれたが、当時の封建的な環境へ不満を募らせ、1919年、北京ではじまり全国的に広がった反帝・反封建の「五・四運動」に参加し、特にバクーニンやクロポトキンらの著作を通して無政府主義思想（アナキズム）の影響を受けた。

1923年、上海へ出た巴金氏は、東南大学付属中学に学ぶかたわら、社会運動にも参加し、1925年の反帝愛国の「五・三〇運動」に大きな感銘を受け、1927年から28年にかけてはフランスに留学し、18世紀フランスのブルジョア大革命の歴史を研究している。

このように、時代の流れ、民衆の動きと共に生きてきた巴金氏の作品も自ら時代を反映するものとなり、処女作の『滅亡』を始めとする諸作品はいずれも読者に大きな反響を引き起こしている。

中でも、「激流三部作」の第一部『家』は、同氏の代表作として、最も多くの読者を獲得し、中国現代文学史上重要な地位を占めている。

文化大革命中、一時期失脚するが、復権後は『随想録』において厳しい社会批判と同時に誠実な自己批判を行っている。1981年12月から中国作家協会会長という要職を務めている。

主な作品

『滅亡』1929 『愛情三部曲（霧・雨・稲妻）』1931～35 激流三部作『家』・『春』・『秋』
1933～40 『海の夢』1932 『長生塔』1934 『神・鬼・人』1935 『日本の友人へ』1938
『火』三部作1940～45 『憩園』1944 『第四病室』1946 『寒い夜』1947 『揚林同志』1977
『随想録』1979～86 『探索集』1981 『真話集』1982 『病中集』1984 『無題集』1986

プロフィール



氏名 黒澤 明
(くろさわ あきら)

生年月日 1910年3月23日生

国籍 日本

黒澤明氏は、当初画家を志していたが、1936年、26才の時に助監督に応募し、映画界に入る。1943年、監督第一作『姿三四郎』を見事なエンタテインメントとして作り上げ、有望な新人と評された。

1950年製作の『羅生門』が、翌年の第12回ベネチア国際映画祭金獅子賞（グランプリ）を受賞、世界の注目を浴びるとともに、日本映画の存在を世界中に知らしめるきっかけとなる。

その後もベネチア、カンヌ等各国の映画祭で多数の映画賞を受賞するなど国際的第一級監督として注目をあつめている。今や世界中の先鋭映画人から偉大な師と仰がれ、その影響力には絶大なものがある。

また、これらの映像により日本文化を海外に広めた業績は大きく、我が国の文化勲章あるいはアジア人功績者を顕彰するマグサイサイ賞、ジャパン・ソサエティー賞の受賞は、同氏の優れた文化人としての高い評価を示すものである。

主な作品

『姿三四郎』1943 『虎の尾を踏む男達』1945 『酔いどれ天使』1948 『野良犬』1949 『羅生門』1950 『生きる』1952 『七人の侍』1954 『生きものの記録』1955 『蜘蛛巣城』『どん底』1957 『用心棒』1961 『椿三十郎』1962 『天国と地獄』1963 『赤ひげ』1965 『どですかでん』1970 『デルス・ウザーラ』1975 『影武者』1980 『乱』1985 『夢』1990

プロフィール



氏名 ジョゼフ ニーダム
(Joseph NEEDHAM)

生年月日 1900年12月9日生

国籍 イギリス

1900年、ロンドンの医師の子として生まれたニーダム博士は、ケンブリッジ大学では医学を専攻していた。しかし、在学中に、ビタミンの発見でノーベル賞を受賞した生化学者ホプキンス教授を知るに至り、生化学者としての道を歩み始めた。戦前の日本の専門家の間では、むしろ生化学者、発生生化学の先駆者として、同博士は知られていた。

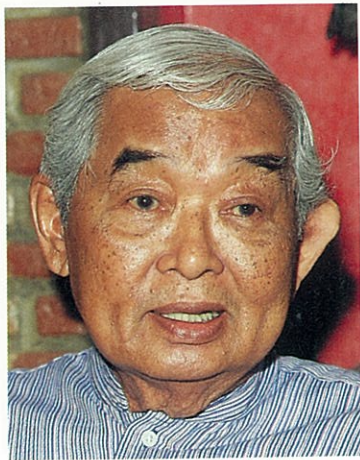
1930年代の後半頃、中国における科学の発達史に興味を持ち、さらに中英科学協力機関責任者として、4年にわたる中国滞在を契機に中国への関心を深めていくこととなった。

同博士の研究は、宗教的情熱に支えられた勤勉さと、類いまれな創造力をもって、彼のライフワークともいべき大著『中国の科学と文明』に結晶していくのである。中国人の科学的業績の究明を辿っているこの著書は、未だ完成の途上であり、89才という高齢にもかかわらず、現在も同博士はその完成に向けて執筆中である。この著書は第二次大戦後における最大の知的業績であり、中国文明のみならず非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させるほどの影響をおよぼし、同博士の名を東アジア科学史の世界的権威として確立させたのである。

主な著作

『化学的発生学』1931 『生化学と形態発生』1942 『中国の科学』1945 『中国の科学と文明』1954（現在第6巻15冊まで刊行）『科学の前哨』〈共編〉1948 『文明の滴定』1969 『中国のランセット』1980 『中国科学の流れ』1984

プロフィール



氏名 ククリット プラモート
(Kukrit PRAMOJ)

生年月日 1911年4月20日生

国籍 タイ

ククリット・プラモート氏は、1950年「サヤーム・ラット」紙を創刊し、経営者として、また編集者、論説主幹として活発な活動を続けながら、自らも健筆をふるい、大衆の啓蒙に貢献した。作家としては、1951年の『王朝四代記』、以後『多くの生涯』、『赤い竹』を次々と発表。どの作品もタイ現代文学の傑作と高い評価を得ている。また、『赤い竹』は西欧十数ヶ国で翻訳され、大きな反響を呼び、同氏の名前を世界に知らしめた。

同氏は、作家、ジャーナリスト以外にも多彩な経歴を持っており、官界、財界を経て1947年政界入り、ただちに国務相に就任、翌年、時のピブン内閣商務副首相を務め、1975年には、第13代タイ国首相の座についている。このように、同氏は、政治家としても、数少ない文民首相としての経歴を経るなど、第一級の人物であると評されている。

また、同氏は、音楽演奏家、舞踊家、映画・舞台俳優等々としても才能を発揮し、多分野にわたる活躍を行っており、タイ国にとどまらずアジアにおける知識人の一つの在り方を示している。

主な作品

『王朝四代記 (シー・ペンディン)』1953 『多くの生涯 (ラーイ・チャーヴィット)』1954
『赤い竹 (パイ・デー)』1955

プロフィール



氏 名 矢野 暢
(やの とおる)

生年月日 1936年4月17日生

国 籍 日本

矢野暢氏の学問の出発点にあるのは、東南アジアの人々と風土への深い愛着であり、その原体験をなすのは、大学院時代に南タイの村落で送った二年間に及ぶフィールドワークであった。

同氏のフィールドワークは、その後も回を重ね、東南アジア地域研究の分野で画期的な手法を確立し、アジア社会の固有原理を全人類史的な視点にてらして明らかにする等、輝かしい学問的業績を上げている。

また、世界的規模での人脈を活かし、各種の国際会議、シンポジウムを企画運営し、学術文化交流に多大な貢献をなしている。

同氏のこれまでの一連の業績、特に社会科学の分野で地域研究の手法を確立した功績は、日本はもとより世界でも高く評価され、本年1月スウェーデン王立科学アカデミーの会員に選出されたところでもある。

本年4月には、京都大学東南アジア研究センター所長に就任、日本の東南アジア研究で重要な役割を担っているこの研究所を拠点に、画期的なアジア学の確立を目指し、卓越したアカデミック・リーダーシップを遺憾なく発揮している。

主な著書

『タイ・ビルマ現代政治史研究』1968 『日本の「南進」と東南アジア』、『「南進」の系譜』
1975 『東南アジア政策』1978 『日本の南洋史観』1979 『東南アジア世界の論理』1980
『劇場国家日本』、『南北問題の政治学』1982 『東南アジア学への招待(上・下)』1983 『東
南アジア世界の構図』1984 『二十世紀の音楽－意味空間の政治学』1985 『冷戦と東南アジア』
『国際化の意味』、『国家感覚』1986 『フローの文明・ストックの文明』、『ノーベル賞』1988
『国土計画と国際化』、『衆愚の時代』1989

受賞者スピーチ



巴金（代理・李小棠）

尊敬する福岡市長桑原先生、御来賓の皆様、私は本日ここで私の父・巴金に代わりまして、福岡アジア文化賞を受賞できることを、大変光栄に思っております。私の父・巴金もこの受賞を大変喜んでおります。

父は1984年に日本を訪れてからもう6年あまり国外に出ておりません。今回も彼はみずから福岡に来るつもりでございましたが、健康状態がよくないため、願いはかなえられませんでした。彼はこのことを大変残念がっておりまして、私から主催者にお詫びするようにしております。

私の父・巴金は1929年、巴金のペンネームで処女作を発表して以来、既に60数年の創作生活を送っております。彼は、数百万字にのぼる作品を通して、歪んだ不合理な社会への怒りと、美しい理想の追求を著してきました。今日、彼が心血を注いだ作品がまだ人々に忘れられておらず、中国、アジアその他の地域にまだ彼の作品の読者がいることは、彼に大きな喜びを与えております。さらに、彼が長年そのために戦って追い求めてきた理想の一部が、既に実現されつつあることも、彼に大きな喜びを与えております。そして、この理想の中には、まさに日中両国の国民が友情で結ばれることも含まれておるのでございます。

父は、福岡市から福岡アジア文化賞創設の初年度に、特別賞を与えられることに対して、大変感動しております。彼は、この受賞を彼個人の事業に対する評価ではなく、福岡市民の皆様の長い伝統と歴史を持つ中国文化に対する尊重と中国人民に対する友情の表れであると考えております。

また、彼は、福岡市が福岡アジア文化賞を創設したことを、非常に賞賛しており、この賞が、アジアの文化の発展とアジア文化の世界における地位の向上をもたらすことに大きな役割を果たすことを、確信しております。

健康状態と高齢のため、父は現在あまり執筆をしておりません。しかし、彼は彼の古い友人・中島健蔵先生のように、日中両国民の友情の一層の発展を促進することを、彼の生涯の最後の事業にすることを決めております。

ここで、私は父・巴金に代わりまして、福岡市が彼にこのような崇高な名誉を与えてくださったことに対して、心からのお礼を申し上げたいと思います。そして、彼と同時に受賞されました各先生に、お祝いの言葉を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

受賞者スピーチ



黒澤明（代理・黒澤久雄）

どうもありがとうございます。本来ですと、父・黒澤明がここに来てお礼の言葉を申さなくてはいけないのですが、あいにく、今、「八月のラブソディー」——”Rhapsody in August”——という作品に入っております。題名のとおりこの夏を撮り逃がすわけにはいきませんので。夏の光ですとか、夏の雲ですとか、そういうものは、映画にとっては非常に重要な題材ですので、どうしてもここには来れず、残念がっておりました。皆様によろしくと申しておりました。

来年の5月にはこの作品が発表になると思います。黒澤明というのは、映画しか撮れない男ですので、映画の中で皆さまにお礼を申すと思います。ぜひその辺のところを分かっていたきたいと思います。どうもありがとうございました。

受賞者スピーチ



ジョゼフ・ニーダム

私は、今日を受賞者の中でも、御列席の皆様の中でも最も年寄りだと思います。そういう観点から申し上げたいと思います。

今、本当に心からの感謝を、福岡の皆様方にこの賞を私に授けてくださったことに対し、お礼を申し上げます。

こう申してもよいのではないかと思います。つまり、このような賞を授けるという仕事は、特に、今回の賞は、東洋のことを西洋の人々に伝えるという役目が、この賞にはあると思います。そして、私自身、実際、中国の科学史についての著作を書くようになってから、ずっとその仕事をしてきたつもりでございます。

トインビーが、ギリシャや他の西洋文明には機械論的な一面があると言っていますが、中国ではどうか、私の研究ではこの点について深く追究したつもりです。

例えば、石油の掘削のように地中を深く掘る技術は、中国では既に紀元前1世紀前から使われております。これは運動論の研究とも関連のある、技術分野の業績です。機械というものは、けっして西洋だけの産物ではなく、中国人も極く早い時期から、機械をたくさん造ってきているわけであります。

これ以上長々とお話ししても、御退屈様でしょうから、心から福岡市の皆様方に、お礼を申し上げて、受賞の挨拶に代えたいと思います。

受賞者スピーチ



ククリット・プラモート

(代理・タイ王国特命全権大使ピラポン・カセムシー)

私にこのような機会を与えていただきまして、タイの卓越した文筆家、政治家、そして民衆的価値を擁護してきたククリット・プラモート氏の代理をつとめさせていただきまして、福岡のアジア文化賞授賞式に出席できたことは、非常な喜びでございます。ここでプラモート氏のメッセージを読ませていただきます。

最初に私が個人的にこの重要な式に出席できなかったことを、心からお詫びさせていただきます。長患いのために福岡に私自身が来ることができないのは、非常に不幸です。私自身、福岡の文化的背景や今日の発展のありさまを見たかったからです。しかし、私は、このような素晴らしい福岡アジア文化賞の創設特別賞を受賞いたしますことを感謝すると同時に、面映ゆい思いがします。というのは、経済発展の急速な今日において、わが国タイの文化は、経済的な発展と近代化によって浸食されています。これは取り返しのつかない損失です。

日本と同じようにタイもユニークな文化と、われわれ独自の文化を持っています。これは寺院とか歴史的な史跡によって明らかです。日本とタイの密接な交流の証は、アユタヤにあります日本人街の遺跡で最近発見されたいろいろな遺跡にも明らかです。

歴史をひもときますと、日本の侍たちがアユタヤに住み着いて、アユタヤの王様のために勇猛果敢な兵士として働きました。そこで侍の大將の一人がタイの南部の広大な地域を治める責任者——ガバナーになったということです。

タイ王国で使われている武器の一つに日本の刀、ロイヤル・ジャパニーズ・ソウドというものがあります。また食べ物について、タイのウドンのようなものは、日本のスキヤキの中身がすべて含まれています。同じように、タイの食器なのですが、それが日本の日々の生活に使われているのをお気づきでしょう。蓋がついている中型のドンブリです。ドンブリというのは、タイのかつての首都の名前です。それから漆器。漆の中に日本名でチンマイという都市の名前。これは北部の町ですが、それが思い起こされます。これは漆器の中心ですが、日本でもチンマイというような漆器の名前があるということです。

実は、日本とタイは、文化を守り、保存することに関して、同じ問題に直面しています。日本の経済発展はタイのそれよりも早かったので、問題もそれなりに大きいかと思えます。タイは最近になってやっと気がついたことがあります。非常に大切な古代の遺跡の犠牲のもとに近代的な進展、発展があるのだということに気がつき始めました。

それと同時に、日本は伝統文化の保存には、すばらしい成績を取めているということも知っています。ですから日本から学ぶことは大きいと思います。新しい世界、古い世界の二つを生きる正しい方法を学びたいと思います。

どの国の文化でもそれを保存するということは、その国の人の心の中に保存することだと思います。その意味で日本はすばらしい業績を取めました。文化とか信仰は今でもわれわれタイ人の心の中にありますが、新しい考え方や価値感によって、今はそうした古いものが危機に直面しています。

人の心に新しいものを取り入れるときには、古い風景や古い価値なしに入れると、幸福や満足にはつながりません。私は文化的惨事を恐れおのきながら今、生活しています。この心を癒やすには、友だちの慰さめが必要です。心を同じくし、志を同じくする皆様方の力づけが必要です。現代を生きる私のために、心と精神の求めに対して、皆様方の温かい心と励ましをお願いいたします。

受賞者スピーチ



矢野 暢

今回の福岡アジア文化賞の受賞は、私の人生におきまして忘れがたい思い出になりそうであり
ます。私は過去30年以上もアジア研究に携わってまいりました。それだけに本日ここで「アジア」
という名の付いた賞をいただいたこと、そしてアジアの文明を担う世界の英知とともにこの栄光
に浴したことは、私の感動を幾重にも深めることになりました。このようなアジアの尊厳を強く
世界に印象づける賞を設立されました桑原福岡市長様ほか各位の御見識に対し、心から敬意を表
したいと思います。

過去30年、私はアジアと関わってまいりました。アジアと関わるということは、苦しいことで
もあります。ときどき、どうしようもなく深い孤独に追い込まれることもあります。アジアとの
関わりが辛く苦しいというのは、特にこの日本の風土においてそうであるように思えてなりませ
ん。

そのような状況であるときに、福岡市が、ここに立ち寄るだけでアジアに関わる日本人の心が
安らぎ、慰められ、そしてアジアとの関わりに誇りを持てるような、そのような場を設けられた
ということは、日本の歴史において画期的なことだと思います。

特にこの福岡アジア文化賞が世界の英知というよりは、アジアの存在を世界に知らしめる英知
を探し当て、そしてアジアが地球の上で尊厳ある文明であったということ、今なおそうである
ということを世界中に知らしめる、そういうものとして始まったことは、これまた画期的であると
思います。

今、日本の歴史がアジアとのかかわりにおいて大きく変わり始めております。それだけに、福
岡の責任は重いと云えましょう。福岡は歴史的にもわが国のアジアに対する窓口として、大きな
役割を果たしてきました。そして福岡は西日本、特に九州を代表して今後ともアジアとの交流拠
点として抜きん出た役割を果たすことが期待されます。

私は、最後に当たって、三つのメッセージを福岡の方々にお伝え申し上げたいと思います。

まず、第一に、日本がアジア世界から生まれたという厳粛な事実を認識し、併せてこの福岡が
古代から現代にかけてアジアとどう関わってきたかという歴史認識を深めていただきたいとい
うことであります。歴史はすべてであります。それを踏まえてアジア世界を特徴づけている歴史
的由緒と現代的苦悩との落差について、深い理解と共感とを持っていただきたいと思いま
す。

第二に、歴史的背景と文化の多様性に富んだアジアの国々が、それぞれ十分に固有な発展を遂

げるよう、福岡は多様な貢献を心がけねばなりません。その際、急速な経済発展に伴って都市化の問題や環境破壊の問題、併せて南々問題などが発生しております今のアジアの現実を、ぜひ直視していただきたいと思います。従って、アジアとの関係を経済的な貢献だけで済ませてはいけません。

第三に、アジアのそれぞれの国が実にふくよかな歴史と文化を持っており、しかもそれぞれ実に豊かな人間性と社会的エトスを満たしているという事実に向けていただきたいと思います。国家は経済的営利だけを行う単なる経営体ではありません。そして国家の尊厳を支えるのは経済ではなく、むしろ文化やエトスであると考えていただきたいと思います。

要するにアジア世界は、福岡が一段と高い成熟に達するために取り組むべき試練に満ちた実験場でありましょう。福岡はもはや、アジアとの真剣な取組みから逃れられない立場に立ちました。国際社会の一員として、私たち日本人がすべてこの福岡を拠点に画期的なアジアとの交流に向けて着実な一步を踏み出すべきであります。

何はともあれ、これからの福岡においてはアジアとの関わりを大事にする、あるいは「アジアとともに生きる」ということが言葉の上だけで語られる時代は、もう終わりにしなくてはならないように思います。

今日は本当にありがとうございました。

記念講演会

日時： 9月4日（火） 午後2時00分～4時00分

場所： 福岡市役所15階講堂

第1回福岡アジア文化賞創設特別賞の受賞者による記念講演会を、授賞式の翌日、福岡市役所15階の講堂で行いました。

記念講演会は、受賞者と市民が直接的に触れ合うことができる、またとない機会でありますので、広く、市政だより、新聞、ポスター等で参加者の公募を行い、当日は、約650名の参加者を得て行ったところです。

講演は、日本語、英語、中国語の同時通訳で行いました。

式次第

開会 14:00

主催者挨拶 福岡市長 桑原 敬一

受賞者プロフィール紹介

講演 ククリット・プラモート（VTRでメッセージ）

巴金（代理の李小棠が原稿代読、VTRでメッセージ）

黒澤明（代理の黒澤久雄がスピーチ）

矢野暢

ジョゼフ・ニーダム

閉会挨拶 （財）よかトピア記念国際財団理事長 川合辰雄